ZONE_ELLIOTT

「相場を読む力」を育むマル秘レポート

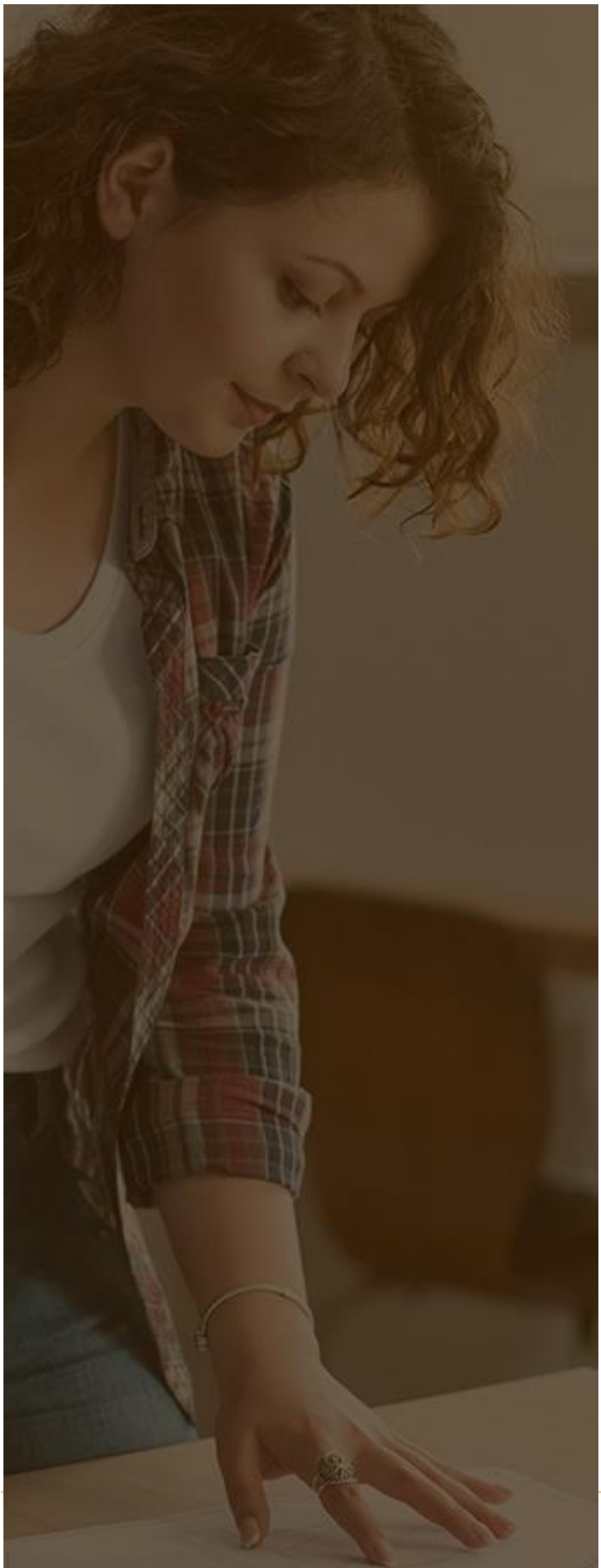
RockWel Inc.

はじめに

ご覧いただきありがとうございます。初めまして RockWel の「M」と申します。
ここで説明する内容は、かなりのボリュームになりますので、複数回に分けて説明していきます。ボリュームとしては、画像が 86 枚程度、文字数が 32,308 文字を超えるもので、無料部分だけでも 21,051 文字ありますので、全てを読むのは正直大変ですが、是非とも最後まで付いてきていただければ、エリオット波動を中心とした損小利大の取引が身に付き、相場の流れや状況などを理解でき、慌てることなく相場に挑み、相場を読む力が身に付きます。
このレポートは「Zone_Elliott」は「どのようなものなのか？」,「どのように使うと有効なのか？」,「本当に相場を読めるようになるのか」などなど皆様が思っているであろうことを記載していきます。
「Zone_Elliott」を理解するためには、少し勉強が必要です。もちろんその必要が無い方は飛ばして読み進めていただいて結構です。
エリオット波動、押し安値/戻り高値、ダウ理論、マルチタイムフレーム、環境認識、レジスタンス/サポート、フィボナッチなどについての説明を行い、これらを理解した上でどのように「Zone_Elliott」を使って相場に挑み、相場を読む力を身に付けていくのかを説明していきたいと思います。

これまでは「条件が揃ったらエントリー！」だったものが、このレポートを読んで理解した後には、「条件は揃ったけど、この流れでその方向にエントリーするのはリスクが高いから、ポジションのエントリーを回避しよう」と、ご自身のトレードから少し離れた視点で「Zone_Elliott」が教えてくれるようになります。
利確に関しても「何処まで伸びる可能性が高いのか」ということも「Zone_Elliott」が客観的に教えてくれるようになります。

相場には 100%はありませんが、如何にその確率を上げていけるかが「勝負の分かれ目」です。
このレポートを読むことで皆様のトレード向上に役立てると自負しております。「Zone_Elliott」を使って相場を読む力を身に付け、Happy な人生を皆様が送れることを祈っております。



ZONE_ELLIOTT

「相場を読む力」を育むマル秘レポート

目次

第 1 回 エリオット波動について 4
第 2 回 ダウ理論について 9
第 3 回 フィボナッチについて 13
第 4 回 マルチタイムフレーム(MTF)について 18
第 5 回 Zone_Elliott の機能紹介 21
第 6 回 Zone_Elliott の有効的な使い方 28

第 1 回 エリオット波動について

エリオット波動の基本

エリオット波動を勉強したいけれどどこから何に手をつけていいか分からないという方、エリオット波動を少しは知っているけれど基本を改めて学びたいという方には参考になる内容になると思います。

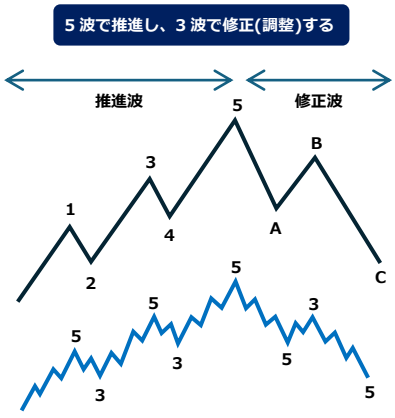
エリオット波動理論は、米国の株式アナリストであるラルフ・ネルソン・エリオット氏が 1938 年に発見したチャート理論です。

相場には一定のサイクルがあり、そのサイクルを繰り返しながら動いていくという考え方を基にしています。

エリオットさんは元々会計士だったが病気で働けなくなってしまい、株式相場の研究にのめり込みダウ理論に大きな影響を受けて特にフィボナッチ比率を使って相場の動きの規則性を見つけようとしました。この数字を使ってというところが確信的であることと、その背景からダウ理論やフィボナッチと相性のいい理論になります。

株式相場を元に生み出された理論ですが、コモディティや為替、暗号資産にも適用できると考えられています。

エリオット波動には、このような背景があることから、ダウ理論やフィボナッチに興味のある方は勉強してみる価値があると思います。



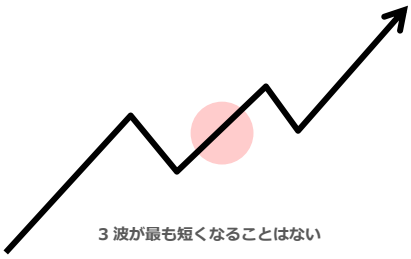
最もコアとなる考え方が、5 波で推進し 3 波で修正するというものです。

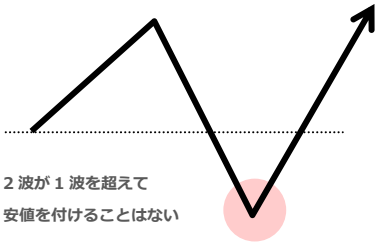
エリオット理論では、相場というのは 5 つの動きで進みその後 3 つの動きを経て調整すると捉えます。トレンド方向に沿ってこの 5 つの波で動く動きを推進波、それに対する調整を行うこの 3 つの動きを修正波と呼びます。

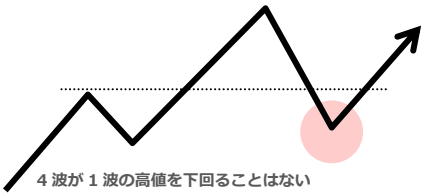
次に重要なことは、これらの推進 5 波修正 3 波が異なる時間軸で何層にも重なり合っているということになります。エリオット波動はフラクタル構造になっており、左図のように上昇 1 波と上昇 2 波の動きの中に異なる時間軸では、5 波で推進し 3 波で修正する構造になっています。このことから推進 5 波修正 3 波を見分けることが極めて重要になってきます。

＊以降のこの仕様の中では修正波についてもこのレポート中では A,B,C 波ではなく 1,2,3 波と記載します。

エリオット波動の基本原則







◇エリオット波動の基本原則は主に以下の 3 つとなります。

1> 推進波の第 1 波や第 5 波より第 3 波が最も短くなることはない。

2> 推進派の第 2 波は第 1 波の始点より安値をつけない。

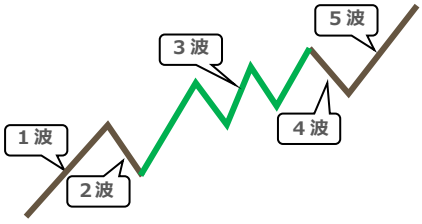
3> 推進派の第 4 波は第 1 波の高値を割り込まない。

エリオット波動のエクステンション

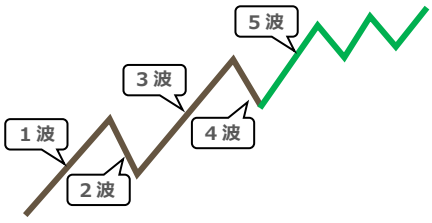
チャートで確認してみると、エリオット波動に近いものの、パターンが崩れているように見えたり、波の数が違っていたりする場合があります。これらはエリオット波動の変形型で、「エクステンション」と呼ばれます。

エクステンションの例で多いのは、第 3 波や第 5 波が長くなるケースです。

3 波が長くなった例



5 波が長くなった例

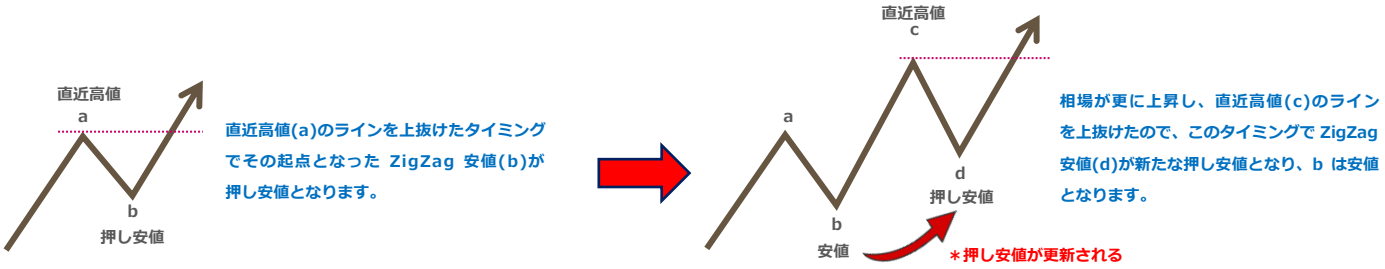


上昇 5 波のそれぞれの波は次のような特徴をもっています。

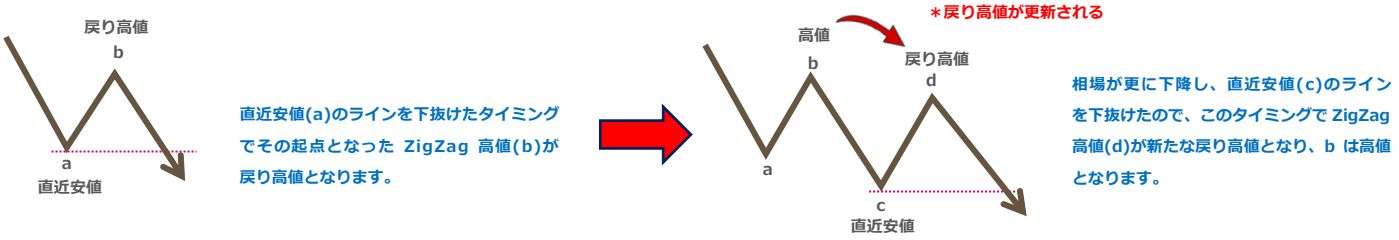
- 第 1 波＝じわじわとした動きで徐々に方向性が明らかに。
- 第 2 波＝第 1 波の大半を打ち消す反対方向のかなり強い動き。売買高が低下することで収束。
- 第 3 波＝通常はもっとも強く長い動きで、5 波のうち最大値幅動くことが多い。
- 第 4 波＝乱高下が続く複雑な動きで高値持ち合いに近い。
- 第 5 波＝かなりのスピードと勢いをもったバブル的な急騰であることが多い。

エリオット波動の 1 波を見つけるために重要な「押し安値」と「戻り高値」とは？

●押し安値：直近高値を更新した高値の起点となった安値のことを言います。
　　また、戻り高値を上抜けたらその起点となる安値を押し安値と言います。



●戻り高値：直近安値を更新した安値の起点となった高値のことを言います。
　　また、押し安値を下抜けたらその起点となる高値を戻り高値と言います。

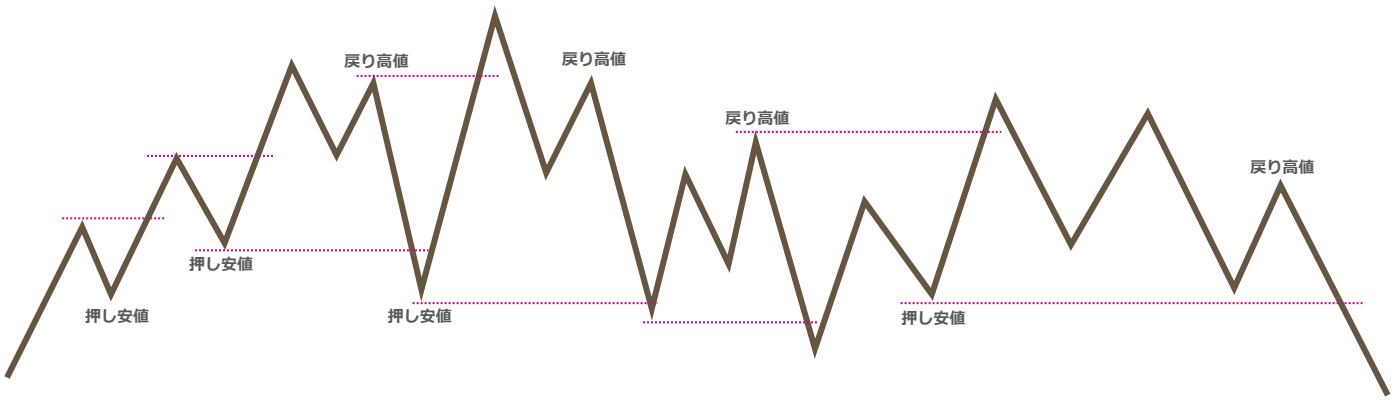


エリオット波動の 1 波の見つけ方

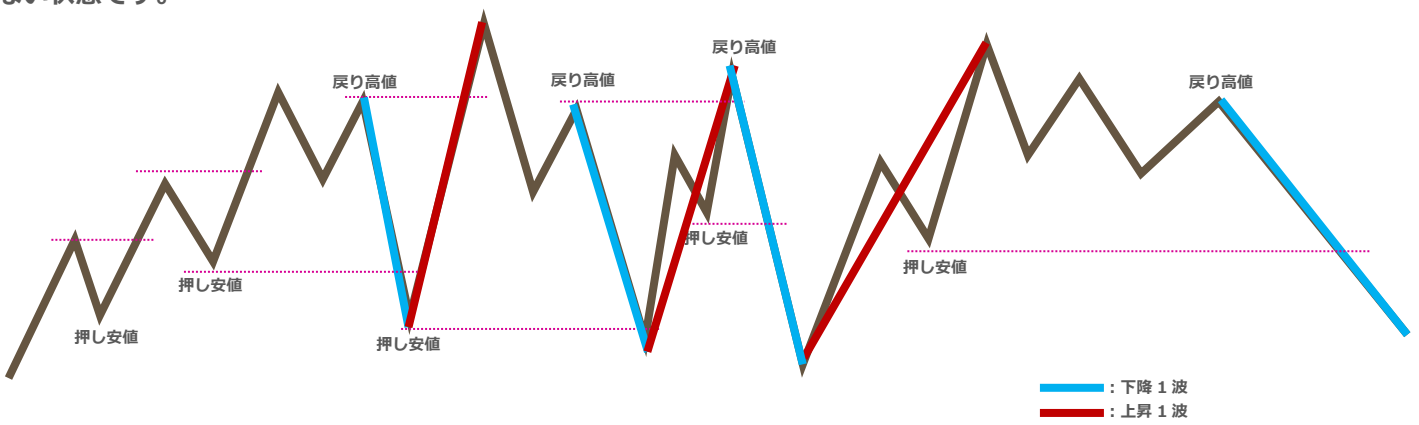
エリオット波動を見つけるためには、まず 1 波を探す必要がありますので、1 波の見つけ方から説明していきます。

●1 波の定義：「戻り高値」を上抜けたら「上昇 1 波」とし、「押し安値」を下抜けたら「下降 1 波」とします。

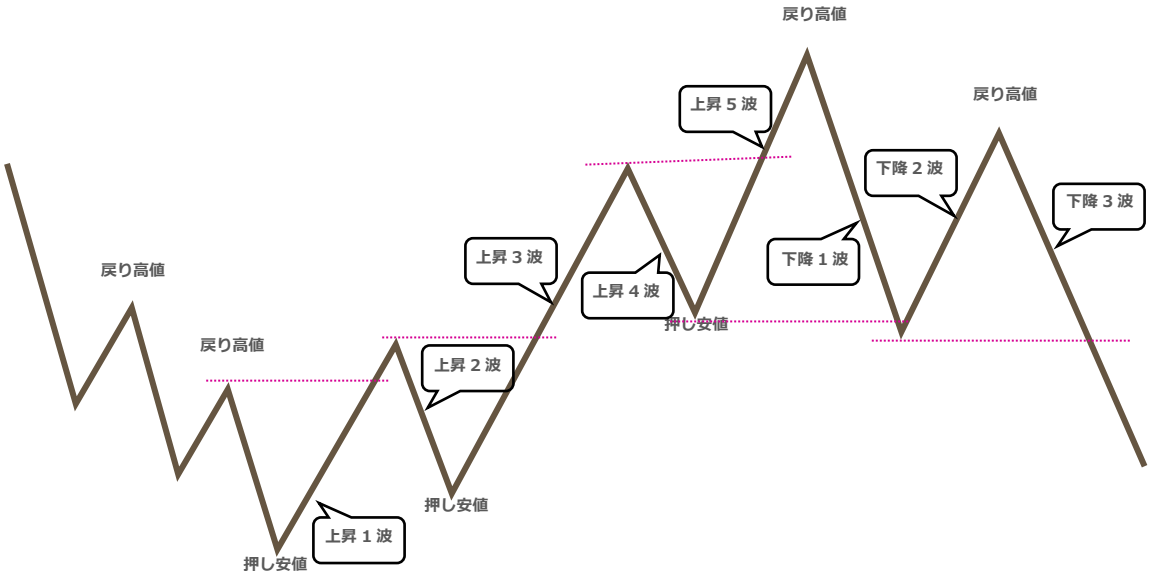
以下の図に押し安値と戻り高値を記載していきますので、左側から確認していき正しく理解できているかチャックしてみてください。本来押し安値は新しい押し安値ができるとただの安値に戻り、戻り高値は新しい戻り高値ができるとただの高値に戻るのですが、以下のチャートではそのまま残しています。



押し安値/戻り高値を正しく理解できていましたか？上図が押し安値/戻り高値のルールに沿ったものになります。
どうですか？押し安値を下抜けて「下降 1 波」発生となり、戻り高値を上抜けて「上昇 1 波」発生となりますが、上記のようなレンジ相場では 1 波発生後に伸びると言われている 3 波が発生していません。全くエリオット波動が機能していない状態です。



前頁の相場にエリオット波動を描画すると上図のようになります。戻り高値を上抜けて上昇 1 波が発生しますが上昇 2 波が崩れて上昇 3 波発生にもなっておりませんし、押し安値を下抜けて下降 1 波が発生しますが下降 2 波が崩れて下降 3 波発生にも至っておりません。上図のような相場では、上位足がレンジ中の可能性が高いです。
詳細は Zone_Elliott の詳細説明ページで紹介しますが、そうなんです、全ての押し安値を下抜けたら「下降 1 波」発生、全ての戻り高値を上抜けたら「上昇 1 波」発生と考えるとダマしが多くてエリオット波動が正しく機能しないので、Zone_Elliott ではゾーンという考え方で「下降 1 波」「上昇 1 波」を決め、ダマしになりそうな 1 波は排除しているのです。
では、どのような状況での 1 波が望ましいのでしょうか？一緒に考えてみましょう。各波についてどのような状況でどのように動く可能性が高いのか？各波の個性(特徴)を考えてみます。



投資家心理を交えて見ると、各波の特徴を捉えやすくなります。

上昇１波	１ 波が出現する前は下降トレンドが続いていることが前提です。その中で発生した反発の動きとなり、大半の投資家が下降トレンドが継続していると考えている中の一時的な反発と捉えます。
上昇２波	上昇 １ 波とは下降トレンドが継続している中での反発の動きでしたので、上昇してきたところは下降トレンドの戻り売りにさらされやすいということで、上昇 ２ 波は深い戻りになり易いという特徴があります。
上昇３波	一番伸びることが多い。延長しやすい。出来高も多い。という特徴があります。上昇 ３ 波は「安値切り上げ・高値更新」が確定し、上昇トレンドがスタートするタイミングになります。そのために下降トレンドの売り手の利確(買い)と新規の買いが集まり易いフェーズになるからです。
上昇４波	４ 波は複雑化、長期化しやすいという特徴があります。利益確定の売りと押し目買いの買いが拮抗しやすいため、複雑化、長期化しやすい。 ４波ではフラットやトライアングル＝レンジが発生しやすい。
上昇５波	５波は明らかな上昇トレンドで強気心理だが、高値圏であり上昇スピードは遅くあまり伸びない。 トレンドの初期からの参加者の利益確定が入り始める段階です。
下降１波	大半の市場参加者は上昇トレンド継続中と捉えている。トレンドの初期からの参加者の利益確定が入り始める段階です。
下降２波	上昇トレンド継続とダマされやすい波になります。実際にはこの後の下降トレンドになる一時的な上昇になります。
下降３波	大きな下落となります。手前の上昇トレンドの利確、新規の売り、２波の損切りなどによって大きく下落します。

エリオット波動に関してのレポートはここまでとなります。Zone_Elliott を正しく有効的に利用するための必要最低限の内容になりますので、不明点は何度も読み返して理解してください。
第 ２ 回目はダウ理論になります。ダウ理論もエリオット波動とは関連性の高い理論ですので正しく理解されることで「相場を読む力」が間違いなく向上しますので、頑張って一緒に学んでいきましょう。

第 2 回 ダウ理論について

ダウ理論とは

第 2 回のダウ理論のレポートがスタートします。
ダウ理論についても結構な量になると思いますが、このレポートを読むことでダウ理論の基礎から応用まで理解できると思いますので、一緒に学んでいきましょう。
ダウ理論とは、投資家心理を交えながら相場のふるまいの特徴を体系化したものであり、チャートを客観的に見るための基礎となります。
これを理解していないと、トレンドの発生、継続、転換という相場の重要な動きを捉えられないことになります。
ダウ理論は、20 世紀前半にチャールズ・H・ダウによって生み出された相場理論です。
チャールズ・H・ダウはジャーナリストで、ウォールストリートジャーナルの創設者であり、ダウジョーンズの創設者になります。アメリカの株価指数のダウ平均株価という指数を考案したのもチャールズ・H・ダウです。

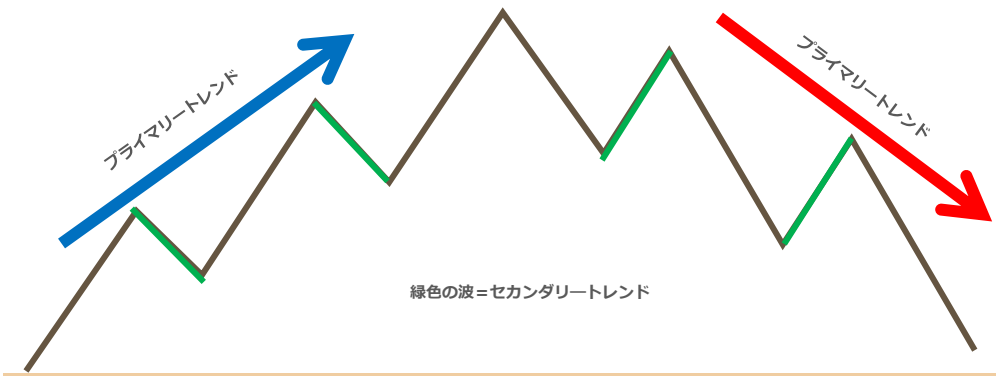
ダウ理論を構成する 6 つの要素

1> マーケットは全ての情報を織り込む

ダウ理論は株価をベースに作られた理論ですが、コモディティや FX などの金融商品に読み替えて適用することが可能です。市場で取引されている金融商品の価格には全ての情報が織り込まれるという考え方です。
例えば企業の潜在的な収益力や経営者の能力、時価の決算発表の内容や経済指標の予測など、例え相場参加者たちがこれらの詳細を知っている訳ではないとしても市場に織り込まれているという考え方です。例えば最近の例で言うと米国の経済指標が強かったりすると、まだ追加利上げの可能性が残っているという形で米国債の利回りが上昇したり、ドルが買われたりという動きがありますが、これも将来本当に追加利上げするかどうか分からないのにあらかじめそのリスクを折り込む例と言えます。

2> トレンドの 3 種類

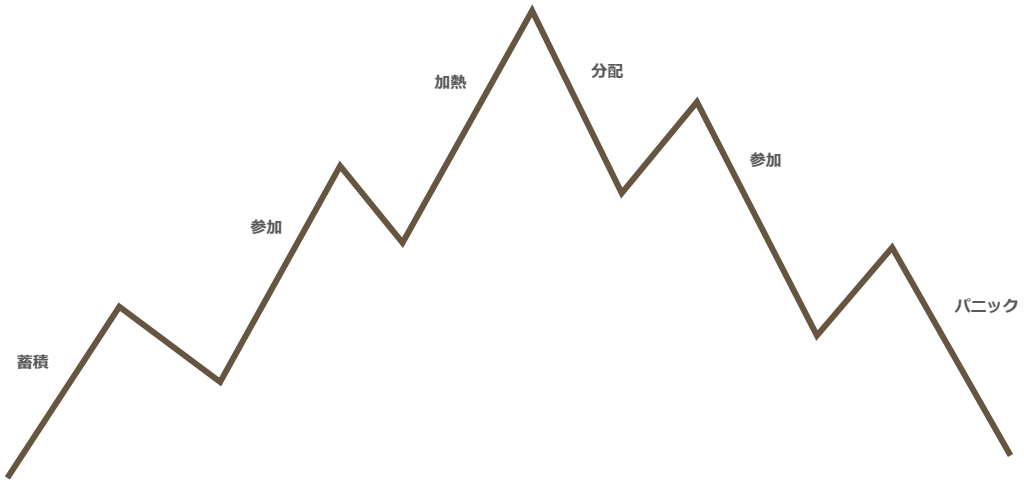
これは相場にはプライマリー、セカンダリー、マイナーという 3 つのトレンドが存在するという考え方です。



上昇トレンドにおけるメインの方向の流れのトレンド(青矢印)をプライマリートレンドと言い、下降トレンドにおけるメインの方向の流れのトレンド(赤矢印) をプライマリートレンドと言います。
プライマリートレンドは 1 年またはそれ以上続くトレンドとして定義されています。
トレンドは一直線で上昇/下降する訳ではありません。上昇トレンドの押し目(緑波)部分や下降トレンドの戻り目(緑波)部分をセカンダリートレンド言います。
セカンダリートレンドは数週間から数か月続くトレンドと考えられています。
マイナートレンドはプライマリートレンドやセカンダリートレンドを構成する日々の細かい動きのことを言います。
マイナートレンドは数日から数週間続くと考えられています。
これら名前を覚える必要はなく、主要なトレンドとそれに対する調整が存在すると理解すれば OK です。

3> トレンドの 3 フェーズ

エリオット波動の推進 5 波、調整 3 波の理論と似て(ほぼ同じ)います。ダウ理論では 3 つのフェーズがあると定義しています。上昇トレンドと下降トレンドに分けて示したのが以下の図になりますが、上昇トレンドと下降トレンドで大きな違いが無いので、上昇トレンドで説明していきます。



●蓄積：一部の先見の明のある投資家が買い集める。
まだ上昇トレンドになるか分からない段階から機関投資家などはこの辺りから少しずつポジションを構築していきます。
●参加：上昇トレンドが始まったことを察知した投資家やテクニカル分析を駆使した投資家が参戦してくるフェーズです。
●加熱：一般の投資家や投資経験の乏しい人々が参加する一方で、先行する投資家は利益確定を始める。
このようにトレンドの初期から参加している人が、どう考えているかを理解できるようになると、チャートを客観的に見ることができるようになり「相場を読む力」がグンと上がります。

4> 株価指数は互いに確認し合わなければならない

例えば、ダウ平均のようなある指数が上昇しているときは、その業種別指数であるダウ輸送平均株価も上昇トレンドになっていない限りは、投資家は新たなトレンドが始まったと捉えるべきではないという考え方です。

ダウ平均は、様々な業種の企業の銘柄で構成されていますが、これらが上昇しているということは、それらの企業の景気が輸送業にも影響するはずだという考えに基づいています。

例えばアメリカのもう 1 つの代表的な株価指数に S&P500 というものがありますが、S&P500 は上昇トレンドになっているのにナスダックは下がっている時は、アメリカの株式市場全体のトレンドではないというように見たり、

例えば、日本の金融株を考えてみると、三菱 UFJ 銀行もみずほ銀行も三井住友銀行も揃って上昇トレンドになっているときは日本の銀行株全体の上昇トレンドが発生していると捉えます。

三菱 UFJ 単体が上昇しているときは、単なる個別銘柄要因での上昇として捉えるという解釈になります。

FX の場合であれば USDJPY や EURUSD だけではなく、AUUSD も NZDUSD も USDCHF も全部対米ドルで下がっているというときに米ドル全体の上昇トレンドとして見るということができます。

このように資産クラス全体や業界や通貨単位でのトレンドの発生状況を見ることでトレンドの信憑性を見極めることができます。

5> トレンドは出来高によって支えられてなければならない

価格が上昇してる時はそれに見合った取引量の増加が発生しているべきだというものです。

上昇トレンドの場合は、

●価格が上昇しているときに出来高も増加

●価格が下落しているときは出来高も減少

下降トレンドの場合は、

●価格が下降しているときに出来高も増加

●価格が上昇しているときは出来高も減少

出来高に伴って上昇/下降しているときは、信憑性が高いと判断できます。

6> トレンドは明確なシグナルがが出るまで継続する

トレンドは明確なシグナルが出るまで継続する、とは逆に言うと明確なシグナルが出たらトレンドは終了となります。

上昇トレンドとは「安値切り上げ・高値更新」している状態を言い、下降トレンドとは「高値切り下げ・安値更新」している状態を言います。

では、このトレンドが終了するのはどのような状態なのでしょうか。

上昇トレンドから下降トレンド転換例

左側の図は、押し安値を下抜けたタイミングで上昇トレンドは終了し、更に「高値切り下げ・安値更新」のタイミングで下降トレンドが始まったと考えます。

右側の図は、押し安値のブレイクに関係なく「高値切り下げ・安値更新」のタイミングで上昇トレンドは終了し、下降トレンドが始まったと考えます。

上記 2 つは、どちらが正しいという議論ではなく、相場には右図で見ている人も左図で見ている人もいるということを知っておくことが重要です。

長々となりましたが、ダウ理論に関してのレポートはここまでとなります。Zone_Elliott を正しく有効的に利用するための必要最低限の内容になりますので、不明点は何度も読み返して理解してください。

第 3 回目はフィボナッチになります。フィボナチもエリオット波動とは関連性の高い理論ですので正しく理解されることで「相場を読む力」が間違いなく向上しますので、頑張って一緒に学んでいきましょう。

第 3 回 フィボナッチについて

フィボナッチとは

フィボナッチ数列は、以下のように、前の 2 つの数を足し合わせていくことでできる数列です。

1, 1, 2, 3, 5, 8, 13, 21, 34, 55, 89, 144, ...

この数列には、自然界の様々な現象の中に現れるという不思議な性質があります。

例えば、植物の花びらの数、木の枝の分かれ方、巻貝の螺旋、ひまわりの種の並び方などに見られます。

フィボナッチ数列の隣り合う数の比率は、次第に黄金比と呼ばれる約 1.618 に近づいていきます。この比率は、美術や建築など、様々な分野で美しいとされる比率として知られています。

フィボナッチ数列やフィボナッチ比率は、様々な分野で応用されています。

●金融市場のテクニカル分析：株価や為替レートの変動予測

●コンピューターサイエンス：アルゴリズムの設計

●建築やデザイン：美しい構造やデザインの作成

フィボナッチリトレースメント

フィボナッチ比率を使って相場の押し戻りの水準を測るツール＝フィボナッチリトレースメントです。

フィボナッチ比率である 23.6%,38.2%,50.0%,61.8%,78.6%の比率でみるのが一般的です。

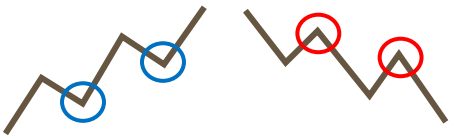
下降 1 波が発生し、何処まで戻して再び下落に転ずるのか。フィボナッチリトレースメントを引いて見ていきます。

38.2%~61.8%の間での戻った場合、大きな 3 波に繋がり易いと言われています。

下降の場合は、高値側から安値側に引き、上昇の場合は安値側から高値側に引きます。

→Zone_Elliott では 1 波が発生したら自動でフィボナッチリトレースメントを描画します。

押し目/戻り目を見極める



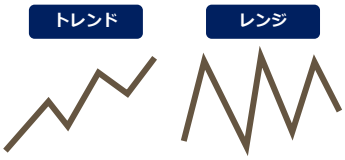
左側のように上昇トレンドによる一時的な下降(青丸)を押し目と言い、右側のように下降トレンドによる一時的な上昇(赤丸)を戻り目と言います。

この押し目/戻り目を見極める手段といてフィボナッチ比率が有効と言われている所以は、裏を返せば世界中のトレーダーが意識しているからより集中することになるのでしょう。

ですが、**どの比率で反発するのかは分かりません。**毎回反発の起きる水準はバラバラです。

フィボナッチが相場で意識されることは分かったが、どうやったらこれを使って「押し目/戻り目」を見極めることができるのだろうか？そこで重要なのがプライスアクションという考え方になります。

プライスアクションとは、一言で言うと高値/安値の推移の仕方のことです。



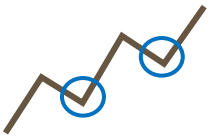
相場にはトレンド相場とレンジ相場の２つしかありません。

これをふるい分けるのは、高値と安値がどう動いているかになります。

上昇トレンドであれば、高値と安値の切り上げが続いている状態のことで、レンジとは高値も安値も更新しない相場のことを言います。

ですので、フィボナッチの押し目/戻り目の候補ゾーン(青丸/赤丸)でプライスアクションに変化が起きるのを見れば良いのです。そして一般的にはフィボナッチの 38.2%~61.8%のゾーンに押し目や戻り目が収まることが多いので、このエリアでのプライスアクションを注意深く見る必要があります。

ではどのように見ていけば良いのか？以下に押し目の見極め方を例に説明していきます。



押し目の形成とは、上昇トレンドの合間に発生する一時的な下降トレンドになります。

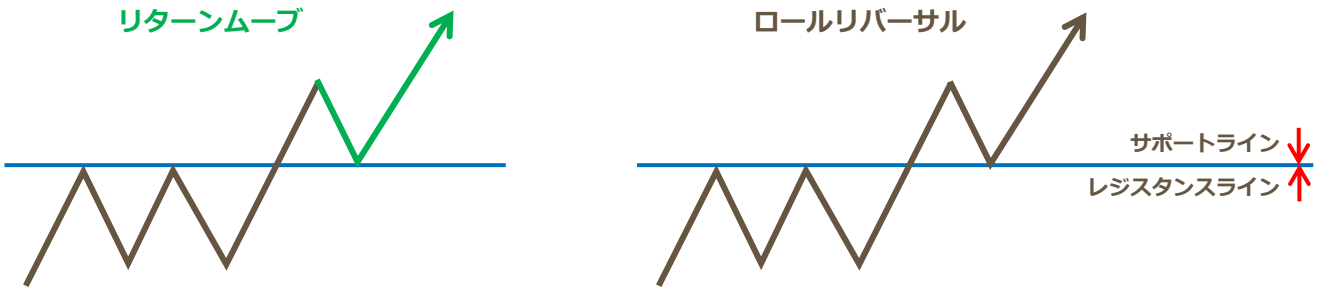
トレンド方向に沿って押し目で買っていくには、一時的な下降トレンドが終わったことを見分けられれば良い訳です。上記で説明しましたが、相場にはトレンドとレンジしかないので、下降トレンドからレンジになったところ、下降トレンドから上昇トレンドに転換したところが分かれば、そこが押し目だと分かります。従って、それを監視すれば良い訳です。以下のチャートで見ていきます。

ということで、フィボナッチリトレースメントという道具に加えて、プライスアクションというスパイスを加えることで、押し目/戻り目を見つけやすくなります。

リターンムーブとは

リターンムーブは、水平線や移動平均線、レンジの上限といったラインを使うテクニカル分析で確認できる現象です。
例えば、水平線をチャートがブレイクした後、ブレイク方向へ伸びるのではなく一度水平線に戻る値動きが起こります。
この水平線に戻る値動きがリターンムーブですが、リターンムーブ後には再び水平線ブレイク方向にチャートが動くため、ブレイク後でも水平線付近でエントリーできる手法として使えます。
リターンムーブを利用することでチャートの反転の際の判断基準が明確になるため、損失を抑えやすくなります。
リターンムーブを活用すれば損失を最小限に抑えるだけでなく、予想していた相場の動きと逆の動きになっても、リターンムーブの動きを抑えていれば、逆に反発することを理解しているため、損失から利益を狙える可能性もあります。また、損切ポイントも明確になるため、リスク管理の点においても有効なのがリターンムーブの特徴です。

リターンムーブとロールリバーサルの違い



リターンムーブと似た用語としてロールリバーサルがあります。
ロールリバーサルとは、水平線やトレンドラインなどのラインを使うテクニカル分析において、ラインブレイク後にラインの機能が転換する現象です。
例えば、レジスタンスラインとして機能していた水平線がブレイク後に、サポートラインとして機能する現象を指します。
リターンムーブとロールリバーサルは分析する内容としてはラインブレイクを使うため同様です。
リターンムーブはラインブレイク後のチャートの動きに着目し、ロールリバーサルはラインブレイク後のラインの機能に着目しています。
ラインを使うテクニカル分析を対象とする点としては同じ意味を持つため、リターンムーブを覚える時にはロールリバーサルをセットで覚えると、効率よく FX の技術を覚えることができます。

このレポートでのリターンムーブ

一般的なリターンムーブの説明では、対象のラインをブレイクした後に戻ってきて、そのラインに触れて再度上昇していくと言われていますが、実際には触れるだけではなく、対象のラインをブレイクした後に戻ってきて、そのラインを下抜けた後に再度上昇していくパターンもあります。
レンジブレイクの例で言うと、レンジの上限で売って下限で買うようなレンジ内でのトレードを行っている人達はレンジの上限の上には売りを行った人達の損切り(買い)が貯まっており、レンジの下限には下位を行った人達の損切り(売り)が貯まっています。
レンジ上限をブレイクすると、レンジの中で売っていた人達が含み損になりますので、押して戻ってきたところには売り手の決済が入りやすいので、反発に繋がりやすいということになります。
このレンジ上限ブレイク後の戻りに関しては、各人の考え方もあると思いますが、「ヒゲがレンジ上限触れたら戻ったと判断」、「終値がレンジ上限の内側にはいったら戻ったと判断」、「レンジ上限に近づいたら戻ったと判断」など様々な判断が存在します。
当レポートの中では、「終値がレンジの内側に入ったら戻ったと判断」として説明していますが、これが正解ではなく、

各人での考え方やテストを行って決定していくものとなります。
例えば、「終値がレンジの内側に入ったら戻ったと判断」とした場合、当然ながらヒゲが触れただけの場合などはエントリーできないケースもあると思いますが、一喜一憂するのではなくエントリーできなかったのは自分の仕様に合っていないのでエントリーしなかったとして、パラメータをその都度変更するのは止めるべきです。

フィボナッチエクスパンション

フィボナッチエクスパンションとは「エクスパンション＝拡大」という言葉の意味が示す通り、どこまで相場が拡大するのかを予想するツールで、主にトレンド相場で用いられます。
押し目や戻りが入った後、その後どこまで相場が動くのかを探る指標がフィボナッチエクスパンションです。
→Zone_Elliott では 3 波が発生したら自動でフィボナッチエクスパンションを描画します。
詳細は Zone_Elliott の機能紹介で説明します。

第４回 マルチタイムフレーム(MTF)について

マルチタイムフレーム(MTF)分析とは

複数の時間軸のチャート状況を総合的に見て環境認識を行う分析方法です。

なぜ上位足が重要なのか？それは、下位足の動きは常に上位足に影響を受けるからになります。

相場を動かしている機関投資家と呼ばれる人たちは、大きな資金を長期間で運用しています。チャートの時間軸に当てはめてみると月足や週足に該当する期間になります。更に注文のサイズも莫大です。

従って、長期時間軸の動きが重要になります。

マルチタイムフレーム(MTF)分析で行う４つのポイント

1> トレンドかレンジかの見極め

相場は「上がる」「下がる」「横這い(レンジ)」の３つしかありませんので、今の状態を見極めます。

2> 目線

売り買いの優劣を見極める境界線のことです。

3> サポート/レジスタンス要素

高値/安値やチャネルラインのことを言います。

4> 波

エリオット波動を指します。

マルチタイムフレーム(MTF)を使った考え方

実際のチャートで見てみましょう。CADJPY の H1 のチャートで下降２波が発生しています。

次のページで上位足のチャートを見てみよう。

▼まずは週足から

▼次は日足をみてみよう

▼最後は 4 時間足をみてみよう

▼もう一度 1 時間足チャートで考えてみます。

このようにマルチタイムフレーム(MTF)分析では、長期足から中期足、短期足の順に分析することで、相場の流れを把握し、トレードの方向性やタイミングを判断していきます。

私がトレードするならば、上図の H4 の押し安値ライに Sell Stop、SL は下降 2 波の終点(a)+5pips の予約設定して放置します。

考えるのは利確位置です。D1/W1 の下降 3 波が下降 1 波まで伸びると仮定するならば、この位置から 800pips 近く伸びることになります。それが成功すると究極の利大損小となりますね。

また、只今購入者プレゼントの RiskRewardChecker を使ってリスクリワードを見ながら H1 で細かくトレンドに沿って利益を積み上げていくこともできると思います。

いずれにしても、このシナリオでいくと H4 の上昇のエリオット波動は上昇 3 波が大きく伸びず間違っていたということになります。

Zone_Elliott は全て自動で書き換えなく描画していますが、全てが正しく描画できている訳ではなく(全てを正しくできたら神になります)、それぞれの波の描画が正しいのか否かをマルチタイムフレームをはじめとする様々な情報で判断していくことが重要です。

第 5 回 ZONE_ELLIOTT の機能紹介

やっと、Zone_Elliott の説明まで辿り着きました。皆さんついてきていただけましたか？

Zone_Elliott について説明していく上で必要な項目について早足で説明させていただきましたが、ここからが本番になります。

Zone_Elliott では「相場を読む力」を身に付けることに重きを置き、様々な相場に柔軟に対応できる力を付け、何故この位置でエントリーしたのか？自信をもって売買できるようになることを目指しています。

では、Zone_Elliott の各機能について紹介していきますので宜しくお願いします。

Zone_Elliott の各機能の紹介

1> ZigZag の自動描画

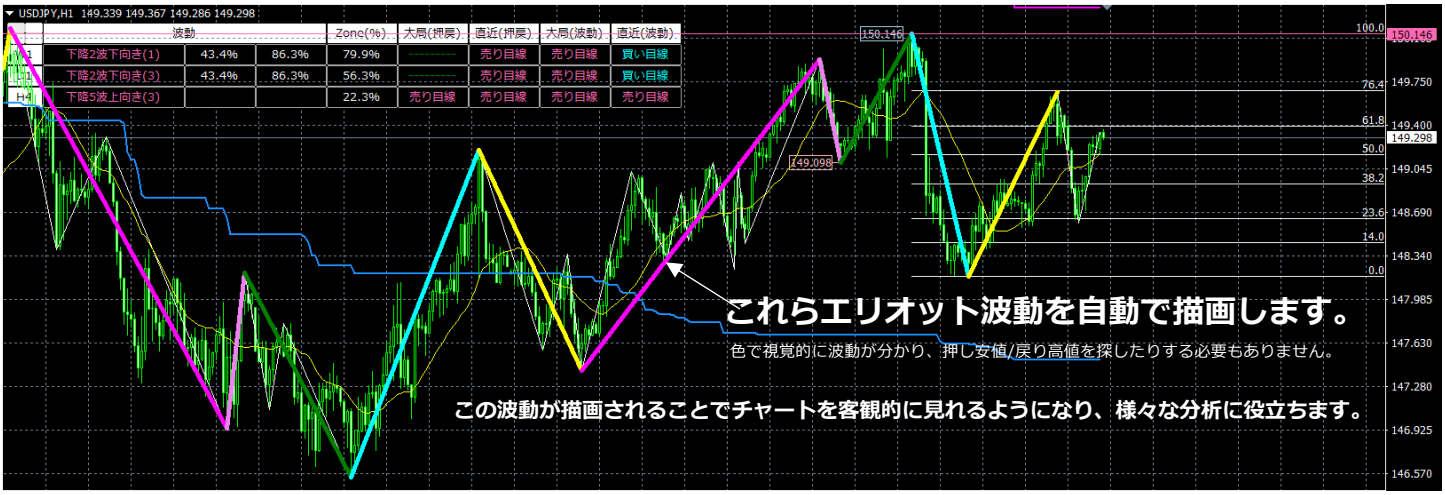
「押し安値/戻り高値」をカウントするベースとなる ZigZag は MA(基準波 MA 期間)を跨ぐことによって決定します。最後の「押し安値/戻り高値」はチャート上に表記され、新しい「押し安値/戻り高値」が出来たら更新され、古い表示は自動で消去されます。

2> エリオット波動の自動描画

エリオット波動は全て自動で描画されます(下図参照)。

高値圏で押し安値を下抜けたら下降 1 波が発生し、安値圏で戻り高値を上抜けたら上昇 1 波が発生します。

3 波は 1 波の大きさ×100%(1 波に対する 3 波の長さ%)に達したら色が変わり、目標の 3 波の大きさに達したことが視覚的に分かるようになっています。



▼Zone_Elliott の 1 波から 5 波について ＊以下表は上昇波動について説明しますが、下降波動も同じ考え方です。＊()内はパラメータです。

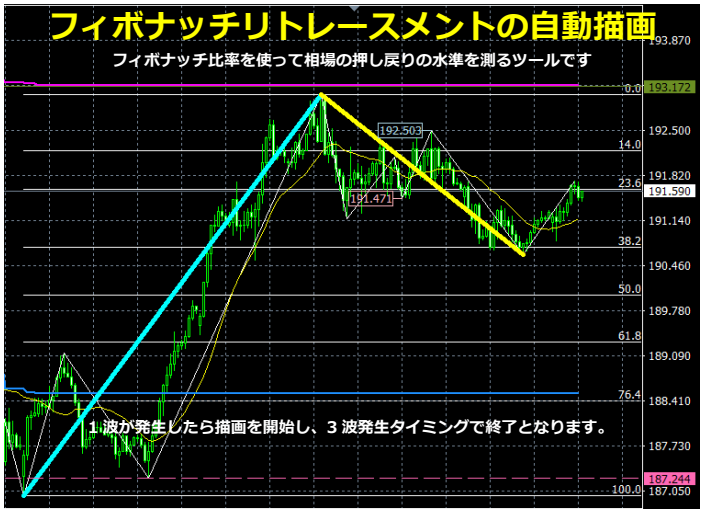
上昇 1 波	過去 500 本(ゾーン期間)の最高値を 100%、最安値を 0%として、上昇 1 波の始点が 20%(ゾーン安値圏)以下で戻り高値を上抜けたら、「上昇 1 波」発生となります。
上昇 2 波	「上昇 1 波」発生後 MA(20)を実体が下抜けたら「上昇 2 波」発生となります。「上昇 1 波」の終点を上抜けたら「上昇 3 波」発生となり、「上昇 1 波」の始点を下抜けたら上昇波動は終了となります。 「上昇 2 波」発生後「上昇 1 波」の終点の上抜けまたは「上昇 1 波」の始点の下抜けするまでは ZigZag の山や谷の数に制限はありません。 表記は、「上昇 1 波」発生後 MA(20)を実体が下抜けたら「上昇 2 波」、MA(20)を実体が上抜けたら「上昇 2 波上向き(1)」、MA(20)を実体が下抜けたら「上昇 2 波下抜き(1)」と()内をカウントしていきます。 これにより「上昇 2 波下抜き(3)」となっている場合、「上昇 2 波」発生後 MA(20)を実体が 3 回下抜けた状態だと分かります。 ＊この()内のカウント方法は 2 波に限らず全ての波動で共通です。
上昇 3 波	「上昇 3 波」は「上昇 1 波」の大きさ×100%(1 波に対する 3 波の長さ%)に達した(以降完成上昇 3 波と呼びます)ら色が変化し、目標到達を視覚的に分かるようになっています。 「完成上昇 3 波」に達し、次の ZigZag 高値が確定したらそこが「完成上昇 3 波」の頂点となり、同時に「上昇 4 波」発生となります。「上昇 3 波」は「上昇 1 波」の大きさ×100%(1 波に対する 3 波の長さ%)に達することができずに「上昇 2 波」の終点を下抜けたら上昇波動は終了となります。 3 波終了機能 A=true の場合、「上昇 3 波」中に「高値切り下げ・安値更新」になったタイミングで「上昇 3 波」は終了とします。 Zone_Elliott は、「上昇 1 波」の始点が 20%(ゾーン安値圏)以下で「戻り高値」を上抜けたら「上昇 1 波」発生とされ、「下降 1 波」の始点は 80%(ゾーン高値圏)以上で「押し安値」を下抜けたら「下降 1 波」発生としますが、3 波後のきれいな反転はゾーンを考慮しない=true の場合、「完成 3 波」後はゾーンに関係なく「戻り高値」を上抜けたら「上昇 1 波」発生とし、「押し安値」を下抜けたら「下降 1 波」発生となります。
上昇 4 波	「完成上昇 3 波」になり、MA(20)を実体が下抜けたら「上昇 4 波発生」となります。 「上昇 4 波」発生後、「完成上昇 3 波」の終点を上抜けたら「上昇 5 波」発生となり、「上昇 1 波」の終点を下抜けたら上昇波動は終了となります。 3 波後のきれいな反転はゾーンを考慮しない=true の場合、「完成上昇 3 波」後はゾーンに関係なく「押し安値」を下抜けたら「下降 1 波」発生となります。 3 波後のきれいな反転はゾーンを考慮しない=false の場合は、ゾーンの内側では「完成上昇 3 波」の終点を始点とする「下降 1 波」が発生することはありません。
上昇 5 波	「上昇 5 波」発生後、「上昇 4 波」の終点を下抜けたら上昇波動は終了となります。 5 波後のきれいな反転はゾーンを考慮しない=true の場合、「上昇 5 波」はゾーンに関係なく「押し安値」を下抜けたら「下降 1 波」発生となります。 5 波後のきれいな反転はゾーンを考慮しない=false の場合は、「上昇 5 波」中に「下降 1 波」の始点が 80%(ゾーン高値圏)以上で「押し安値」を下抜けたら「下降 1 波」発生とします。

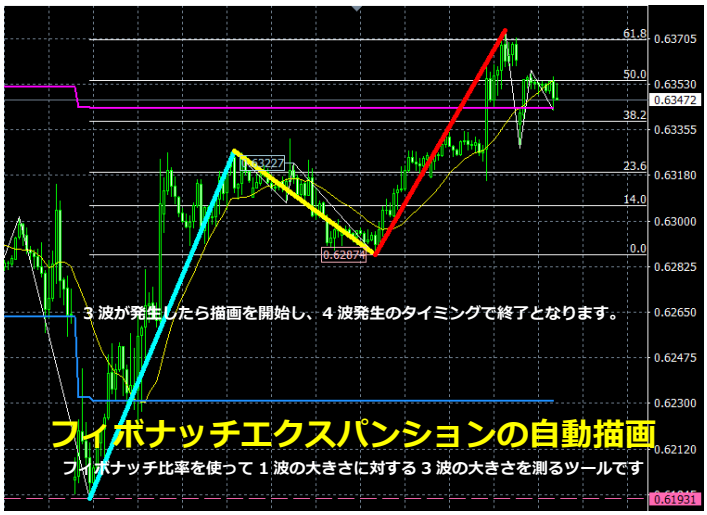
3> フィボナッチリトレースメント/フィボナッチエクスパンションの自動描画

左側がフィボナッチリトレースメントの自動描画例で、上昇 1 波が発生したら描画を開始し、上昇 3 波発生のタイミングで終了します。

右側がフィボナッチエクスパンションの自動描画例で、上昇 3 波が発生したら描画を開始し、上昇 4 波発生のタイミングで終了します。

どちらも自動で描画し、自動で消去されます。





4> レジスタンス/サポートラインの自動描画

Zone_Elliot は、チャート足、MTF-1 足、MTF-2 足、MTF-3 足の大局の「押し安値/戻り高値」のラインをチャート上に自動表記します。「戻り高値」のラインはレジスタンスとして機能し、「押し安値」のラインはサポートとして機能します。マルチタイムフレームなので、普段気が付かない上位足のレジスタンやサポートラインが同じチャート上で確認できるので、とても便利です。

各時間足毎に色分けされており、パラメータで変更可能です。

押し安値の場合は点線で表記し、戻り高値は実線で表記します。

「押し安値ライン」は「サポート」として機能し、「戻り高値ライン」はレジスタンスとして機能するので、利確の位置や売買判断に重要なラインになりますので、見逃さないようにしましょう。

5> チャネルラインの自動描画

チャネルラインもマルチタイムフレーム対応になっていますので、チャート上に複数のチャネルラインの表示が可能です。また、チャネルラインの色も各時間毎のパラメーターで変更可能です。

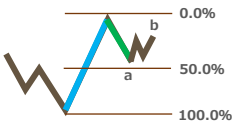
6> 上位足(マルチタイムフレーム)表示

それでは、上位足表記について個々の説明をしてきます。

1> 波動

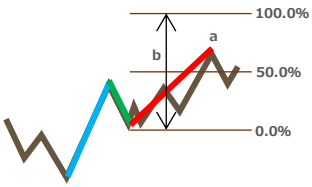
波動はトレンド用エリオット波動の状態を記載しています。空欄の場合はトレンド用エリオット波動が発生していない状態です。

波動の横の数値に関しては、2 波・3 波・4 波時に表記され、他の波動の場合は空欄となります。



左図の場合、上昇 2 波上向き(2) 23.8% 49.3%と表記されます。左側の 23.8%(b)が現在値で、右側が最大戻り率(a)になります。要約すると、上昇 1 波に対して最大で 49.3%(a)まで戻り、現在は 23.8%(b)まで戻ってきている状態となります。

4 波に関しても、2 波と同様な数値の見方になりますので、説明は割愛します。



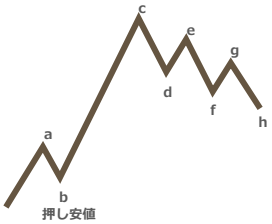
左図の 1 波の大きさ(b)が 200.0pips とした場合、上昇 3 波上向き(1) 122.8pips 200.0pips と表記されます。左側が上昇 3 波の最大値(a)で、右側が上昇 1 波の大きさ(b)となります。つまり、左側の数値(a)を監視することでこれからどの程度伸びるのか予測できるという訳です。

＊1 波に対する 3 波の長さ%＝100%に設定している際の説明になります。

2> Zone

過去 500 本前の最高値を 100%、最安値を 0%として、現在存在する位置を%で表記しています。これにより、安値圏にいるのか、高値圏にいるのか、などの判断ができます。

3> 大局(押戻)、直近(押戻)



Zone_Elliott では、押し安値/戻り高値について、大局と直近という考え方があります。

左図を見ると、a を上抜けたタイミングで b が「押し安値」になり、この「押し安値(b)」を下抜けるまでは「買い目線」となります。ただ左図を見ると直近では「高値切り下げ・安値更新」が起きており、下落しています。このような相場の場合は、「買い目線」と表現すると正しく現状を表現できないため、「直近」という概念を導入しています。

Zone_Elliott では、d を下抜けたタイミングで e が「直近の戻り高値」となり、更に f を下抜けたタイミングで更新され、g が「直近の戻り高値」となります。

従って、左図では大局(押戻)が「押し安値(b)」なので「買い目線」、直近(押戻)が「戻り高値(g)」なので「売り目線」となります。

また、大局と直近が共に 2 つ前の安値が「押し安値」の場合は共に「買い目線(2)」と表記され、大局と直近が共に 1 つ　前の高値が「戻り高値」の場合は共に「売り目線(1)」と表記されます。

4> 大局(波動)、直近(波動)

大局(波動)：買い目線＝上昇 1 波、上昇 2 波、上昇 3 波、上昇 4 波、上昇 5 波
　　売り目線＝下降 1 波、下降 2 波、下降 3 波、下降 4 波、下降 5 波

直近(波動)：買い目線＝上昇 1 波、上昇 3 波、上昇 5 波、下降 2 波、下降 4 波
　　売り目線＝下降 1 波、下降 3 波、下降 5 波、上昇 2 波、上昇 4 波

5> 上位足チャート表示

ここまでが、Zone_Elliott の各機能紹介となります。ここまでで何となく何ができるのか？を理解していただければ幸いです。分からない個所などがある場合は、何度も読み返して理解してから次の章にんでもらえると理解が深まると思います。

また、エリオット波動について皆様によく理解していただきたいことがあります。

ネットや動画など様々なところでエリオット波動についての講釈は散乱していると思います。ほぼ全てのエリオット波動による説明は後付けで、「後からなら誰でもカウントできるよね」といったものばかりです。

私たちが開発した Zone_Elliott は、後付けではなくリアルに自動でエリオット波動を描くことができるツールです。

「エリオット波動」の定義の一つとして「3 波が大きく伸びる」がありますが、「その場面だけ知りたい」という声があると思います。

すなわち「1 波の大きさ以上伸びる 3 波を知りたい」ということになると思います。

大きく伸びる 3 波を見つけるということは、3 波が大きく伸びるであろう 1 波を探すことになります。

基本的に「戻り高値」を上抜けたら「上昇 1 波」発生となり、「押し安値」を下抜けたら「下降 1 波」になります。

但し、単に「戻り高値」を上抜けて「上昇 1 波」発生としていたら、大きく伸びる「上昇 3 波」になることなく失敗だらけになってしまいます。

そこで Zone_Elliott は、その名の通りゾーン(Zone)という概念を用いて「安値圏」から「戻り高値」を上抜けたものを「上昇 1 波」とし、「高値圏」から「押し安値」を下抜けたものを「下降 1 波」と認定しています。

これにより、大きく伸びる 3 波になるケースの割合は増えましたが、100%ではありません。そこで、「どの 3 波が大きく伸びる可能性が高いのか」を判別できるような機能を 1 つのチャート上に集結させ、正しい判断ができるツールとして誕生したのが Zone_Elliott になります。

神ではないので、100%正しく自動で描画するのは無理があります。ですが、Zone_Elliott ではマルチタイムフレームや様々なツールで間違ったエリオット波動の描画を排除することが可能になります。

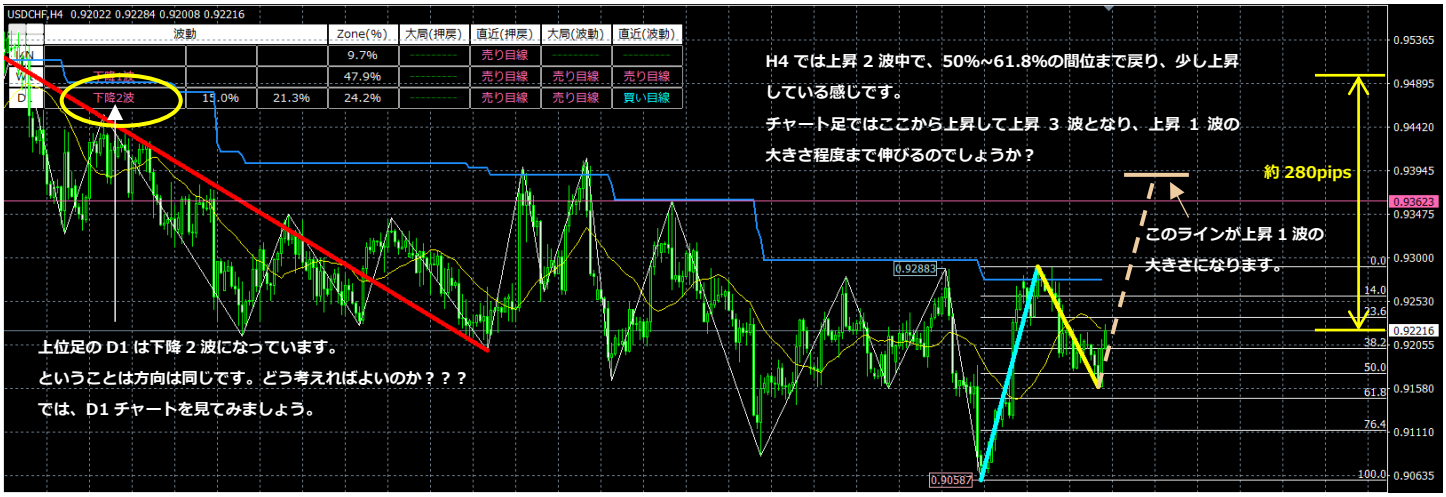
同時に、これからの話を理解することによって、「相場を読む力」が格段に UP すると思います。
単にツールの機能を使って取引するだけではなく、相場を分析して理解した上で自信を持てるトレードができるようになるために皆さん頑張っていきましょう。
次ページ以降に「Zone_Elliott はこのように使え!!」という使い方に説明をさせていただきます。

第 6 回 ZONE_ELLIOTT の有効的な使い方

ここからが本番といっても過言ではありません。
長々と説明してきましたが、皆さんが待ち望んでいたであろう Zone_Elliott をどうやって相場に活かせば勝つことができるのかという章になります。相場を理解すると、今まで勝てなかったのが突然勝てるようになります。
過去の自分の取引を見直すと「なぜここで買ってしまったのか」と思う場面は多いと思います。
これからは、勝つにしても負けるにしても、なぜ勝てたのか、なぜ負けてしまったのかを理解していくことで勝率はグンと上がります。「よく分からいけど偶然勝った」は長続きしません。
ということで、まずは以下のチャートをご覧ください。

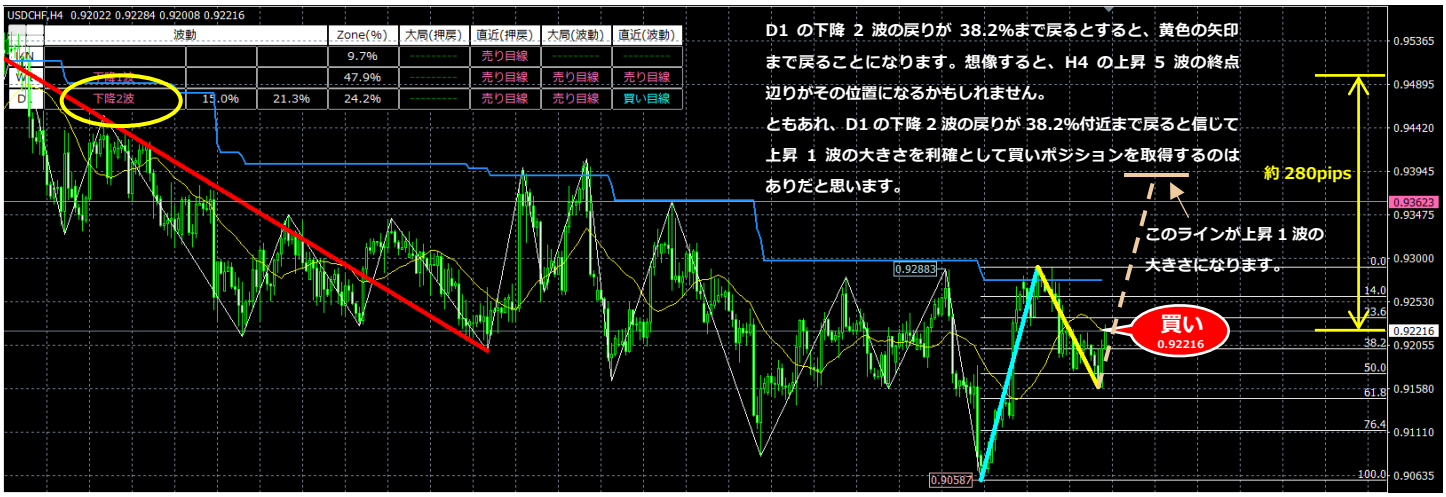
Zone_Elliott で相場を読む力を育む　Part-1

▼USDCHF H4



▼USDCHF D1

▼もう一度 USDCHF H4 に戻ります。



▼USDCHF H4 の続きを見てみましょう。

どうですか？何も難しいことはしていません。

4 時間足で上昇 2 波が 50%~61.8%の間程度まで戻ってきたところで、「さぁどうするか？」上位足の状況を確認すると波動は下降波だが、下降 2 波なので下降時の一時的な上昇中でした。

更に下降 2 波が発生して間もない状況で、21.3%まで戻り現状は 15.0%の位置にいる状況でした。

「少なくとも 38.2%程度までは戻るのではないか」というのが私の予想でした。一般的に考えても 2 波が 38.2%まで戻らない確率は低く、少なくとも 38.2%までは戻るだろうと予測しました。

更に 38.2%戻るとなると現在値から 280pips 近く戻ることが分かりました。

この値を 4 時間足で見ると、上昇 1 波の大きさよりも大きな値であることから、38.2%まで戻らなくてもそのかなり手前で上昇 1 波の大きさになります。

すなわち、上昇 1 波の大きさまで伸びる可能性は高いだろうと予測して買いエントリーした結果見事に予想通りの結果となり 147.7pips も獲得することができました。

このように、上位足の状況を見てどうするべきか考えることが重要です。

Zone_Elliott で相場を読む力を育む　Part-2

▼GBPUSD H4

▼GBPUSD D1

▼GBPUSD H4

今回は、結果的に H4 において売りエントリーしたら、下降 1 波の大きさまで下落して「エントリーしておけばよかった」と思われたかもしれません。
しかし、それが間違いなのです。上位足の D1 を確認した際に上位足は上昇 3 波中でこれから基本的には上昇していく状況です。しなしながら W トップのような状況で下落していく可能性も考えられる状況でした。
どちらの可能性もあるということです。
ここで重要なのは W トップと考える場合、まだネックラインを超えていない点です。ネックラインを超えた場合(上昇３波の始点を超えた場合)は、D1 における上昇波動は終了となりますので、下降の可能性は高くなります。
従って、ネックラインを超えたならば、「W トップが成立して下落していくだろう、だから H4 でも売りを仕掛け良いはずだ」と自信をもって判断できれば何も問題はありません。
ですが、今回のように上昇３波中なので、このタイミングではネックラインも超えていないので、売りの可能性は考えることはできませんので、H4 における売りをスルーしたのは正解だと思います。
結果的に売りポジションをエントリーしておけばよかったではなく、何故売りポジションをエントリーしたのか、明確な根拠がない場合は Zone_Elliott で下降２波中であっても、100%信じるのではなくスルーすることも重要になります。
これが相場を読む力となり、無駄な取引を行わず精度の高い箇所でのトレードを増やし、精度を上げていくことが FX で継続的に勝っていくために重要なことになります。

Zone_Elliott で相場を読む力を育む　Part-3

▼USDJPY M15　次は少し小さい時間軸(M15)を使って見ていきましょう

▼USDJPY H1

▼USDJPY H4

▼USDJPY M15

▼USDJPY M15

▼USDJPY M15

今回の取引を含め如何に上位足の状況を把握してトレードすることが大切なのか、十分に理解できたと思います。

偉そうに説明してきましたが、決して難しいことではありません。ちょっとした努力で成績は全く違うものになってくるでしょう。

Zone_Elliott は 1 つのチャートで複数の上位足の状況を把握することができ、「行くべきか止まるべきか」の判断をざっくり行うことができ、気になる場合は上位足の状況を更に詳しく分析することで、正しい判断ができるようになります。

とにかく自信をもってトレードすることが重要で、自信がないときは無理にトレードするのではなく回避する勇気も必要になります。

・・・・・さて、突然で申し訳ありませんが無料公開はここまでとなります。なお、ご購入いただいた方は以降も無料で閲覧できますのでご心配いりません。**ご購入いただいた方には、無料ダウンロードできます。一度限りの PW を発行いたしますのでダウンロードして保存してください。**

ここから先は、更に突っ込んだ Zone_Elliott の有効的な使い方や考え方について説明していきます。

FX 業界で生き残れる人は全体の 1～2 割と言われていますが、勝てない人に共通していることは、ネット上で誰もがアクセスできる情報を寄せ集めて戦っていることです。

ネット上にはエリオット波動やマルチタイムフレームなど含め、正しいものと間違ったものが混在しており、取捨選択を正しくしないと間違えたまま身に付けてしまい、それをベースにしている限り勝てませんが、その情報が正しいか否かは、相場から撤退したときに後から結果として分かるものです。

Zone_Elliott の開発の経緯は、エリオット波動は後付け理論で、「後から描くのであれば誰でも描くことができるじゃん」といった問題を解決するために、書き換えることなく自動で正しく描画することはできないかということを出発点として開発をスタートさせました。

上昇 1 波は戻り高値を上抜けたら発生し、下降 1 波は押し安値を下抜けたら発生します。1 波が確定したらあとは簡単で、2 波、3 波と描いていけば良いのですが、これを読んでいる方はおそらく 1 波の大きさ以上伸びる 3 波を知りたいはずです。この大きく伸びる 3 波についてネット上の大多数は伸びたところだけを拾って後付けで説明している訳です。

実際に、先程説明した戻り高値を上抜けて上昇 1 波発生とした場合、上昇 3 波が大きく伸びないものが多く出現することになります。これがエリオット波動を自動で描画する難しい所になります。

Zone_Elliott は、安値圏から戻り高値を上抜けたときのみ上昇 1 波とし、高値圏から押し安値を下抜けた場合のみを下降 1 波としています。

これでかなりのダマしを省くことはできるのですが、それでもダマしは全てなくなる訳ではありません。

そこで、同じチャート上に上位足の状態を表記し、Zone_Elliott で描くエリオット波動が正しいのか否かを判断できる設計になっています。

まず、エリオット波動やダウ理論を理解することで相場をかなり理解しやすくなります。チャート上に MA や MACD、RSI など様々なテクニカル指標を表記している方も多いと思いますが、相場の流れや展開を理解する上でエリオット波動は大変分かり易く「相場を読む力」を身に付けるのに必須アイテムだと思います。

エリオット波動を理解するためには、ダウ理論やフィボナッチ、押し安値/戻り高値、レジスタンス/サポート、マルチタイムフレームなど様々な知識が必要で、これらを総合して理解することで「相場を読む力」が格段に向上します。

ここから先の情報はピンポイントでエントリー箇所を見極めて一攫千金というものではありません。

Zone_Elliott を使って、トレードをしてはいけない方向を明確にして最終的に勝ちを積み上げていくという、守って増やす守備的な内容です。

以降の有料の情報が皆さんの力になることを本気で願っております。